

# 水から、自ら暮らしを見直そう

大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所

所長 多木 秀雄

Written by Hideo Taki

## はじめに

「水」という物質は、人類が生きてゆくために不可欠であり、私たちが日々の生活場面において数多くの関わりを持つものである。地球は全体で見れば水に恵まれた惑星であるが、人間が利用できる量としては限られており、地球上の総水量のわずか0.04%に過ぎない。今後、都市化に伴う需要の増加、汚染等により、水資源に関しては、世界人口の増加や開発途上国の経済成長により深刻さが増すとされている。

わが国は、水資源に恵まれているため、つい水の価値を忘れがちであるが、海外から輸入する食品や工業製品を生産するのに使われている水の量を考えると、水の輸入大国であると言え、この水資源の将来に傍観者であるわけにはゆかない。

今回の特集では、生活者の視点から、新たな地球規模の環境問題とも言える水の問題を捉えなおし、身近で大切な資源である水とどう付き合っていくか、水から暮らしを見直し、今後のあり方を問うものしたい。

## 水と私たちの関わり

私たち人間は、体重の約60〜70%を水が占めており、水を飲まなければ、人により差はあるが、2週間以上は生きられない。1日に人間1人がどの程度の量の水を必要とするのか。普通成人が1日に飲む水の量は約2.5リットルと言われる。1人1日の生活用水(一般家庭の飲料、調理、洗濯、風呂、水洗トイレ等に用いる水、飲食店、ホテル等の営業に用いる水、公園の噴水等に用いる水の合計)使用量は、これに比してはるかに多く、一時期よりは減少したものの2005年度において307リットルであった(『平成20年版日本の水資源について』国土交通省)。全国の使用水量(平成17年)は、生活用水が19%、工業用水が15%、農業用水が66%の内訳であった(『平成20年版日本の水資源について』国土交通省)。生活用水については、1965年頃には現在の半分程度の使用量であったのが、内風呂化や水洗トイレの普及等、近代的なライフスタイルとともに水の使用量が大きく増加した。

これまで私たちが共に生き、時に苦しめられることもあった水で

あるが、水の大切さ、関わりの深さは、「水を治めるもの、国を治める」、「覆水盆に返らず」、「水の恩はおくられぬ」、「我田引水」等、水という言葉を含む諺や熟語が多いことからわかる。水と関わるいろいろな出来事が、生活や社会を作り、水のある空間は、「生きてゆくのにふさわしい条件がそろっているところ」として人々の憩いの場となり、都市の賑わいや個性的な文化を産んだ。私が小学生であった1960年代前半は、まだ川遊びや海水浴が身近で、結構大きな池や田んぼがあり、水辺が近いところにあった。水辺に生息するメダカ、ホタルやアメンボ等の生物と遊ぶ生活も身近にあった。

## 水環境の変化と問題の所在

その後、上下水道の整備、河川の洪水対策等が進められ、便利さ、生活の安心がもたらされた反面、水辺が遠いところへ行ってしまったように思われる。すなわち、私たちの幼少期のような水辺の生物との接点がなくなり、日常生活において私たち人間が自然生態系と共生している実感を持つことが難しくなった。

蛇口をひねれば、いつでも水が出る便利さはもちろん有り難い。しかしながら、その便利さが水を大切にすることを希薄にし、多消費するライフスタイルが定着していった。水源の面からは、都市部では多くの道路面が舗装されたことと下水道が整備されたことにより、雨が降ると雨水が地下に浸透することなく、そのまま不用なものとして下水道管を通じて排水として流されてしまう。水源としての利用の面でもつたいないとともに、処理施設で浄化されるとはいえ、排水の量が多いと放流による水域への影響は無視できない。

近年、「仮想水（バーチャルウォーター）」の貿易に関心が高まりつつある。これは農畜産物等、製品の生産過程で使用される水のことであり、多くの国々が仮想水の輸入によって自国の水不足を回避している

一方、仮想水の輸出によって水不足を悪化させている国々もある。日本も例外ではなく、「仮想水」の大量輸入をしている。その量は飲料水や生活用水の消費量とは比較にならないくらい多い。

水は生活に必須であるため、エネルギーと同様に供給面での安定確保は重要な事項である。災害による供給停止が怖いのが、阪神・淡路大震災の際、私の両親が住む地域も被害にあり、水道が止まった。しかしながら、幸いにも井戸があったため、近所に提供することにも、これにより急場を凌いだそうである。今日では井戸のある家庭は多くないであろうから、遠方の水源からの供給に全面的に依存することには不安がある。

## これから意識し、取り組んでゆきたいこと

将来に向けて持続可能な社会を築くために、これから私たちは何を意識し、何に取り組んでゆかねばならないかを考えてみたい。

まずは、「水の消費」についての暮らしを見直し、質、量ともに必要なレベルを考えた生活に戻してゆかねばならない。私たち生活者自身が「使い捨て文化」から脱し、「大切に使う」、「用途を考えて使う」、「循環を考えて使う」ことを意識することが大切である。いろいろな用途に対して量的に節約して使うことは言うまでもないが、質的にも、例えば庭への散水等高い水質を必要としないものには、水道水でなく雨水の利用なり、使用済みの水の再利用をする暮らしを考えてゆきたい。

「仮想水」については、本号においても、沖大幹東京大学教授に詳しくご紹介いただいている。製品の生産・流通に要した水の量を製品に表示しようとする企業も現われてきている（表1参照）。私たちが「仮想水」の認識を持ち、製品を作る企業による水消費量の「見える化」が進展して、生活者が日常生活で節約を意識するようになれば、

地球全体の水使用量の抑制、水不足への対応へとつなげてゆくことが期待できる。

一方、「水の供給」については、貴重な水の供給源である雨水の活用を真剣に考えてゆかねばならない。雨水が舗装された道路面から下水道を通じて流出するばかりでなく、降ったところに「貯留する仕組みを作る」ことは、水不足の問題解決への重要な一方策である。水の循環システムの中に雨水を組み入れることができることも、水源を生活に近いところに取り戻すことにもなる。今後の高齢化社会においては、夫婦のみ、あるいは単身で生活する期間が長くなるため、生活の安心・安全の面から地域コミュニティの役割が期待されるが、このような生活に近いところに、例えばコミュニティとしての上水の貯水池を持つことで共有の水源とすれば地域力も強められる。環境都市で有名なドイツのフライブルク市のヴォーバン地区では、あらゆるエコライフを実践しているが、その中の一つに、「雨水を地下に浸透させる仕組み」がとられている。住宅の屋根に降った雨なども前庭を通じて道路に流れ、それが傾斜



【写真1】ドイツのフライブルク市ヴォーバン地区の雨水滞留システム  
出典：『フライブルクのまちづくり』村上 敦 学芸出版社 2007年

に沿って雨水浸透のためのくぼ地へと流れるというものである（写真1参照）。このような取り組みは、地域に住む生活者と行政とが協調して作ってゆかねばならない。

おわりに

本特集では、私たち人間と水との関わりを振り返りながら、今日直面する水問題の論点を識者の先生方にご紹介いただいた。本特集の論考をもとに、水問題をより多くの方々に認識いただき、日本という地形、気候を踏まえたローカルな暮らしでの取り組み、仮想水を意識したグローバルな視点での水問題への対応をしてゆけることを期待する。

これからの持続可能な社会形成のための水との新しい付き合いにおいては、生活者ができることから地道な取り組みを行うとともに、行政、企業、大学と協調し、発想を転換して、自然との共生を念頭に置いた取り組みを行うことが大切であろう。

「水」を含んだ言葉が多々あることは先に述べたが、これらは私たちが暮らしてゆく上での戒めとなる。今の時代、「水に流して」「済まそうとする人がしばしばいる。自身の目の前から問題は消えても、誰かが下流でその影響に苦しむことになる。安易に「水に流して」「済まそう」と、長年にわたって蓄積した財産も「水泡に帰する」こともあると認識しないといけない。

なお、私もCELは、中長期的な視点から、よりよい社会作りを目指し、エネルギー・環境、住まい・生活、都市・コミュニティの領域において調査・研究と発信・提言を行ってきている。今後とも、今回の特集での報告内容も踏まえ、さまざまな機会を介して皆さまへの情報発信と提言を行い、貢献してゆきたいと考えている。